マルチスピーシーズ(複数種の)人類学／民族誌からみた動物(非人間)と人間の境界、そのゆらぎについて

宮本万里(慶應義塾大学商学部)

1. 人新世を語り直す糸口としてのマルチスピーシーズ民族誌？

1)「人新世」という時代

- 人新世＝人間活動が圧倒的な速度で自然の改変をもたらすようになった時代（およそ 1950 年代以降？プラスチック、コンクリートなどの大量生産・大量消費、森林破壊、核物質の堆積？）を、新しい地質年代として定めるべき、との議論。
- 大気科学者パウル・ クルッツェンと生物学者ユージン・ストーマーが唱えた。「私たちはもはや「完新世」ではなく、人間活動が地球の生態系や気候に重大な影響を与える「人新世」という新たな地質年代を生きている」

2)「文化と自然」の二分法・二分割の再導入になるという懸念・批判

- 人新世という概念が、〈人類〉を自然化し（文化を自然とし)、自然と文化の分割を再導入しているのではないか（Yusoff 2015: 4）
- 人新世という概念の受容は複雑な過程になる、なぜならこの用語は世界の多くの地域で存在していない自然と文化の二元論を前提に主張しているからだ。(西洋の外側へ出てしまえば) 人間と非人間の分割に依拠しない、異種混淆的な世界を生み出す過程がある。(de la Cadena 2015)

3) 人間と自然の二元論は解体し、人間以上の領域へと踏み込む時代になる？

- 「人新世では、人間が自然に大きな影響を与えるという意味で、自然と人間という二元論が意味をなさなくなる。言い換えれば、自然は人間化され尽くされて、「もはや外なる自然は存在しない」ことになる。」(奥野 2017: 78)

- 「人新世では、自然と人間の二元論だけが消えてなくなるのではない。自然科学と人文科学という学問の二分法もまた意味をなさなくなってきている。歴史家チャクラバルティによれば、人新世では、生態学は人間という要素を考えざるを得ないし、人文科学もまた他の生物種と人間の関係性を検討しなければならないようになってきている（Chakrabarty 2009)。今日、人文科学は**人間を超えた視野を獲得**することによって、西洋思考に潜在する**人間中心主義を脱中心化**しつつある。その中核に位置付けられるのが、**人間と非人間のどちらかに特権を与えることなしに、人間と非人間の両方の活動を認めるというアイディア**である。」(奥野 2017: 78)

⇨ 文化人類学では、人新世が議論されるようになった時期は、**「人間以上(more than human)」**の領域へと踏み込みながら、あるいは**「人間的なるものを超えて(beyond the human)」**、学問を再編成するようになった時期と重なる。21 世紀に入ると、文化表象やその政治をめぐる再帰的な議論から、動植物やモノなどを含む自然と人間が絡まり合って生み出す世界をめぐる学問へと、思考の方向を大きく転換させてきた。(奥野 2017: 79)

- マルチスピーシーズ人類学は、他種をたんなる象徴、資源、人間の暮らしの背景と見ることを超えて、種間および複数種間で構成される経験世界や存在様式、他の生物種の生物文化的条件に関する分厚い記述を目指す(van Dooren 2016).

- マルチスピーシーズ民族誌／人類学は、人間を静的な「人間－存在（human being)」ではなく、動的な「人間－生成（human becoming）と捉える。(奥野 2019: 6)

- …人間と人間以外の存在という二元論の土台の上で繰り広げられる、人間と得的の他種との二者間の関係ではなく、人間を含む複数種の 3+n 者の「絡まりあい」とともに、複数種が「ともに生きる」ことを強調する。人間主体に現れる範囲のみで他種は捉えられるべきではない。それはたんに象徴的・唯物論的な対象ではないとされる。(奥野 2019: 7)

2. アニミズムを真剣に受け取るということ

1) アニミズムと多様なエージェンシーへの注目

- 「…科学的概念の発生を広範な文化的背景を考慮せずに説明することは難しい。文化的背景こそが、科学者たちが概念に生命を与え（アニメイト)、しかる後に非生命化（ディ・アニメイト）することを可能にする。…**西洋史における主な謎の一つは、「いまだにアニミズムを信じる人々がいる」ことではなく、多くの人々が様々なエージェンシーを増殖させ、日々それらとより深く結びつくようになっているにもかかわらず、彼らが単なる物質からなる非生命的な世界をいまだに素朴に信じていることにある。**地球史が進むにつれて、こうした信念はますます理解し難いものになっていくだろう。」(ラトゥール 2017: 64)

- 「…「科学的世界観」をめぐる大いなる矛盾は、それが首尾よく世界から**歴史性**を除去し、それと同時に－ダナ・ハラウェイ(Haraway 2008)が「世界と共に」あることと呼ぶような－世界のうちにあることの一部としての内在的な**物語性**を除去してきたことにある。」(ラトゥール 2017: 70)

2) フィリップ・デスコラ「自然の構築」より

- 「自然」の概念＝社会に構築され/文化・歴史的に決定され/相互に異なっている
- 我々（西欧）自身の二元論的な見方を一つの存在論のパラダイムとして、それに当てはまらない多くの文化に対して投影すべきではない。
- 「生き物、人工物、キメラの間の境界がぼやけ、また、**非人間が人間と多くの特性を共有しているような多くの文化**を前にして、土着の分類基準を引き出すために用いられる形態学的・行動学的相同性の基準の有用性は極めて限定的である。というのも、そのような共通の基準は**土着の分類基準を等閑視**することによって、様々に概念化された存在を、我々が西洋的な自然のカテゴリー内に見出せると想定している諸物の分類クラスへと単に押し込めているだけなのだ。」(デスコラ 2017: 27)
- <u>象徴生態学（デスコラ 2017: 32）</u>
- <u>同一化の様式</u>
  a. **トーテミズム的なシステム：**自然種の間にある経験的に観察可能な非連続性を用いて、社会的単位の境界を定める分節秩序を概念的に組織.（出自集団を持つ社会、非人間は記号）

b. **アニミズム的なシステム：**自然の存在物に人間的な性向と社会的な属性を授ける.（共系的社会・分節社会どちらにも存在、非人間は関係の項）

c. **ナチュラリズム：**偶然性と人間の意思による影響どちらにとっても外的な原理に従って、ある事物が存在し展開しているのだという信念.

- <u>関係の様式</u>

「これらのアインデンティティ（トーテミズム、アニミズム、ナチュラリズム）は、社会的プラクシスにおいてみいだされる多様なスタイルと価値に反映された関係の様式ないし相互作用の図式に媒介されるとき、相互に区別され、人類学的意義のあるものになる。」(33)

・関係の様式のありようは**捕食／互酬性**(Descola 1992)および**保護**の３つ。

a. **互酬性：**生物圏を共有している人間と非人間との間にある厳格な均衡の原理に基づく。この生物圏は動的平衡を持った閉じた環（サーキット）として考えられる。宇宙（コスモス）に存在する総生命力（ジェネリック・バイタリティ）の量には限りがあるため、内的な交換は…非人間から奪われたエネルギーの一部が非人間に返礼されるように組織されねばならない。(「動物たちの王」への人間の魂の返還と、その帰結として起こる被狩猟動物への転身、など)

b. **捕食：**非人間は人格であり、人間と血族的あるいは姻族的な紐帯により繋がる。しかし交換のネットワークには属さず、見返りが捧げられることはない。その代替として、女性や子供の血を吸うことでキャッサバの報復を、過剰な狩猟者たちを蛇による咬傷で罰することを「動物たちの王」に委託して報復する。

c. **保護：**非人間の再生産と繁栄の多くが人間に依存する。家畜動物や栽培植物。依存的な繋がりはしばしば互酬的だが、非人間の保護は多くの場合に有益な結果を保証するため、幾分か功利的。デカルト的自然の支配と所有を異なる次元へ。つまり支配が、温情的な保護と美的な娯楽へ変換される小世界。

3) レーン・ウィラースレフ『ソウル・ハンターズ：　シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学』より

- 「…（ユカギール人の）世界では、人格（パーソン）は様々な形態を取ることができ、人間はそのうちの一つに過ぎない。人格は、河川、樹木、霊魂、精霊の形で現れることもある。…さらに、人間と動物は、互いの身体を一時的に借りることで、別種のパースペクティブに出入りすることができる」(p. 12)
- アニミズム：　人間ではない動物（無生物や精霊も含む）に対して、人間の人格と同等の知的、情動的、霊的な性質を与える人組の信念。人類学における最古の概念の一つだが、「古代社会の一見非合理的な側面に過度の注目が集まるのではないかという恐れから」注意して使われてきた。そして人類学者たちは、これら狩猟者たちの観点は、「…かのように」とつけ加えて象徴的な言明として扱うべきであって、文字通りに真剣に受け取るべきではないものと考え、扱ってきた。(pp. 13-14)

⇨「しかし、本書で私は、土着の理解に対する西洋の形而上学の優越性をひっくり返し、精霊、霊魂、動物の人格の性質についてユカギール人が言うことに関して、彼らの導きに従いたいと思う。このようにすることでのみ、私たちは、これらの事柄に関する彼らの観点を真剣に受け取る枠組みを発展させることを望みうる。」(p. 14)

狩猟におけるエルクの模倣「スピリドン爺さんは人間であることをやめてしまったわけではない。むしろ、彼は境界領域的（リミナル）な性質を有していた。彼はエルクではなかったが、エルクではないというわけでもなかった。彼は、人間と非人間のアイデンティティの間にある奇妙な場を占めていたのだ」(p. 11)

キーワード：　パースペクティブの二重性/シェアリング（対等性、差異の無効化）による自己破壊（獲物の地位へ転落する可能性）への恐怖/類似性を非類似化する/ミメーシス（模倣）としてのアニミズム/類似性と同一性を混同しない能力

３．　複数種の関係性で作られる世界に向き合う

１）ラディカ・ゴビンドラジャン「Animal Intimacies: Interspecies Relatedness in India's Central Himalayas」

- 多種間の関係によって人間社会が作られている様を、5 つの動物（ヤギ・ブタ・ウシ・サル・クマ）と人々との関係性から描く。
- ヤギ＝供犠。単に生き物を神に捧げるのではなく、女性たちが継続的に労働と愛情を注いだ対象を、犠牲として捧げることによって価値が生み出される。
- ブタ＝イノシシの関係性における家畜化と野生化。野生のイノシシ＝浄、家畜化されたブタ＝不浄。カースト間の階層性と排除の構造を動物との関係性から描く。
- ウシ＝聖なる動物。呪術的な力をもつ土着のウシと、犯罪者として描かれる外来のウシ。排外主義と国家の宗教ナショナリズム、市場と関連づけながら分析。
- サル=外からの侵略者。我々のサルと外来のサル。
- クマ＝性行のパートナーとして夢想することにより、規範的な女性像と否定される性欲に向き合い、問い直す女性たちのエージェンシー。

⇨ヒマラヤ山岳地域で部族民（トライブ）として生きる人々の生は複数の動物種との関係性なしには成立しない。自然あるいは動物は人間社会の外部に留まるものものではなく、それとの関係性によって人間社会自体が作られている。ポストコロニアル・インドにおける階層性（浄・不浄、家畜と野生）は、「動物性」というキーワードによっても説明できうるのか。

２）マルチスピーシーズ人類学の可能性

- 病気や健康を理解するための手段として（微生物や細菌を対象としたもの）
- 産業資本主義の現場（屠畜場・酪農場・椰子農園）を理解する手段として
- 荒廃した環境や人間の撹乱を一つの要素とみて、そこから生み出される繋がりを描く
- 人種・ジェンダー・帝国主義・宗教に関する問題を考察する際の手がかりとして

３）自身の研究に寄せて

- ヒマラヤ地域の農牧社会を対象に、環境・開発政策が村落社会に導入された際の村人による文化的翻訳過程に注目してきた。（人間を中心とした記述であり、人間が動物や非人間の変化をどう捉えるのか、という一方的なパースペクティブ）
- 人間と非人間（ウシ、ヤク、ブタ、ヒツジ、カエル、樹木など）との関係性については、限定的な記述。それは生態人類学の人たちの仕事という分類。
- 「アニミズム」を書くこと、についての躊躇い。

⇨　非人間（森や動物）の存在を背景として考えず、人々が人格を与えるものを「真剣に受け取り」、人格のあるものとして描くことは果たして可能か？再帰的な語りをする（アニミズムを語る自己を迷信的で野蛮だと捉えられることを認識し、恐れ、語る自己を切り離して語る）人々と、どのようなあらたな関係性が築けるのか。

＊参照文献＊

De la Cadena, Marisol. 2015. "Uncommoning Nature," *E-flux*, August 22nd, 2015.

デスコラ，フィリップ. 2017「自然の構築: 象徴生態学と社会的実践」『現代思想』45(4): 27-45. (1996)

イェンセン，キャスパー・ブルーン. 2017. 「地球を考える: 「人新世」における新しい学問分野の連携に向けて」『現代思想』45(22): 46-57.

Haraway, Donna J. 2008. *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minesota Press. (=ダナ・ハラウェイ『犬と人が出会うとき－異種協働のポリティクス』高橋さきの訳、青土社、2013 年)

カークセイ, S・エベン，ステファン・ヘムライヒ. 2017.「複数種の民族誌の創発」『現代思想』45(22): 96-127. (2010)

ラトゥール，ブルーノ. 2017.「人新世の時代におけるエージェンシー」『現代思想』45(22): 58-75.

中村桂子. 2017. 「「人新世」を見届ける人はいるのか」『現代思想』45(22): 42-45.

奥野克己. 2017.「明るい人新世、暗い人新世: マルチスピーシーズ民族誌から眺める」『現代思想』45(22): 76-87.

Govindrajan, Radhika. 2018. *Animal Intimacies: Interspecies Relatedness in India's Central Himalayas*, The University of Chicago Press.

奥野克己，シンジルト，近藤祉秋（編). 2019.『たぐい』1，亜紀書房.

ツィン，アナ・ロウェンポート（マツタケの世界研究グループを代表して）.「根こそぎにされたランドスケープ（と、キノコ採集という穏やかな手仕事)」『現代思想』45(22): 128-150.(2014)

ウィラースレフ，レーン. 2018.「ソウル・ハンターズ：シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学」奥野克己、近藤祉秋、古川不可知（訳)、亜紀書房.

Yusoff, Kathryn. 2015. "Anthropogenesis: Origins and Endings in the Anthropocene," *Theory, Culture and Society* 33(2): 3-28.